院内看護研究会記録

2007年1月24日

化学療法後の食事摂取困難な患者の食のニードへのアプローチ

7－3病棟　小西みゆき　井出純代
木村恵理子　池ヶ谷千里
早川美穂　木村時枝

Ⅰ．はじめに

当病棟は，血液疾患患者の入院が約30%を占め，その大半が化学療法中でありそれに伴う悪心・嘔吐や口内炎形成などの副作用により，苦痛を生じ食事摂取量が低下する患者が多い．しかし，患者によっては食事へのニードがあることがわかり介入次第では経口摂取量を増やすことができ，なおかつニードの充足を図るができるとわかった．食事へのニードの実際を明確にし，ニードを充足させるための援助ついて考えたい．

Ⅱ．研究方法

H17年7月～10月に入院中の血液疾患患者で化学療法を受けた患者18名に自記式質問紙調査を実施（1泊化学療法を除く）．

Ⅲ．結果・考察

口内炎や嘔気がある患者でも7割が食べたい，又は何か口にしたいという気持ちがあることがわかった．口内炎や吐き気があるのに食べたいという患者がいることがわかり，私達は食のニードへの援助に対する意識が低かったといわざるを得ない．患者の食のニードも個々様々であるが，患者の今までの食生活や嗜好，治療のスケジュールや抗癌剤の種類の違い，症状の程度などこれらもまた個々様々である．看護師が食へのニードに対し意識を高め，情報を共有化し，他部門との連携も含め積極的に患者に関わることで，患者の食へのニードの充足につながると予測される．

管理困難なストーマの症例
～持続閉鎖吸引療法を実施して～

5－3病棟　杉山知子　杉山芽久美
中川真紀　山本知誉子

Ⅰ．はじめに

ストーマ造設をする場合，一般に術後合併症を起こしにくい位置や退院後の生活がしやすい位置を考える，いわゆるマーキングという作業がなされる．しかし，緊急の手術が必要となった場合，マーキングがされずにストーマが造設されることがある．

S氏はイレウスのために緊急手術となり，ストーマを造設した．術前より腸管が拡張していたため，ストーマが大きかった．また，創部が術後感染し離開したため，多量のアイテルの浸出によりストーマ管理は困難であった．今回，この患者に対し，閉鎖持続吸引療法を施行し，創部の改善を図り帰所することができたためここに報告する．

Ⅱ．患者紹介

S氏　60代　男性

H13に交通事故で脳挫傷をおこし，その後寝たきりであり老建施設に入所中．PEGにて栄養管理を行っていた．現病歴として，腹部膨満にて当院受

診，イレウスのため緊急手術施行，横行結腸にストーマ造設される．

Ⅲ．看護の実際

手術により造設されたストーマは9ｃｍ，そのすぐ下に10ｃｍほどの創があった．術後，創部が感染し，離開した．多量の浸出液のため創部を毎日洗浄しアクアセルやウエハーを使用しパウチを毎日交換していた．しかし，浸出液は多く，パウチがもれることが続き，ストーマケアは困難であった．そこで，スタッフ間で話し合い，感染し瘻孔化した創部にネラトンカテーテルの先端を差し込み，その状態で固定し陰圧をかけるという持続吸引療法を施行した．同時にNSTにかけ栄養管理を行い，また褥創の発生予防に努めた．創部とストーマは経時的に写真撮影し，アセスメントと評価を繰り返した．14日間の持続吸引により浸出液も減り，創部の治癒が促進され，術後約50日で離開した創は自然閉鎖し，帰所する．

Ⅳ．考　察

創傷治癒の促進にあたり，壊死組織や異物を除去すること，肉芽の新生と上皮化の促進のために創を閉鎖環境におくことが重要であるとされている．従って，閉鎖吸引療法は効果的であったといえる1)．また，本事例ではストーマケアに関わった看護師がそれぞれアセスメントし，フローシート，写真，カンファレンスにより情報を共有し問題点の把握と同じ目標を持ち関わることができたと考える．より効果的なストーマケアを行うためには，ストーマケアに関しての知識とアセスメント力が必要であると考える．

Ⅴ．おわりに

持続閉鎖吸引療法はあまり耳にしない言葉だったが，実際にこの方法を行ってみて，創傷治癒に有効であったことが実感できた．今後も創傷治癒に関する知識やケア方法を学び続け，専門病棟としてよりよいストーマケアができるように努力していきたい．

参考文献

1）穴澤貞夫，倉本秋，高尾良彦ほか：ドレッシング　新しい創傷管理．ヘルス出版．1995

乾燥茶葉を使用した看護用品の一考案

手指拘縮によって生じる皮膚炎の予防を目指して

5－2病棟　○山　田　彩　乃　古　川　睦　子
田　中　まゆみ

Ⅰ．はじめに

当病棟は，脳血管障害の後遺症やさまざまな疾患によって寝たきりとなっている患者が多い．患者の多くに関節可動域の障害（以下拘縮と称する）が生じている．手指拘縮は手を開くことができないため，良肢位保持目的でタオルや市販の手指拘縮予防具を使用してきた．しかし，タオルや予防具ははずれやすく，また，手掌の乾燥が不十分で臭いや皮膚炎を生じていた．そこで，乾燥茶葉を使用した看護用品「にぎ茶っ手」を考案・作製・使用し，良肢位を保持しながら，乾燥・消臭が得られ，皮膚炎予防とむくみ解消をすることが出来たので，ここに報告する．

Ⅱ．研究目的

乾燥茶葉を使用した看護用品を考案・作製し，手指の良肢位を保持しながら，乾燥・消臭効果について明らかにする．

Ⅲ．研究方法

平成18年7月1日～12月31日の入院で手指関節拘縮のある患者9名に，「にぎ茶っ手」を装着し，湿潤・臭い・浮腫・不快感の4項目について装着時と数日毎に観察し評価した．その患者に関わったスタッフ22名にアンケート調査を行った．

Ⅳ．結果・考察

手指拘縮によって生じる皮膚炎の予防目的に乾燥緑茶の消臭・給湿作用を考慮し看護用品を考案し作成した．手指拘縮の場合，過度の把握や関節の変形により確実な固定方法でないと外れやすいということがわかった．手指への固定支持面を広くし，患者に合わせて固定力を調節できるマジックテープを使用し作成した．手掌から手背にかけて固定することで乾燥茶葉ホルダーのずれを防ぐことができた．茶ホルダーを改良し手の形やサイズに合わせて工夫する